

女親もなくなりて、家もわろくなり行く間に、此男河内の國に人をあひしりて通ひつゝ、離れやうにのみなりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきも見えて、河内へ行く毎に、男の心の如くにしつゝ、出し遣りければ、あやしと思ひて、もしなき間に異心もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、河内へ行くまねにて、前栽の中に隠れて見ければ、夜更くるまで琴を搔鳴らしつゝ、打歎きて、此歌を詠みて寢にければ、これを聞きて、夫より又外へもまからずなりにけりとなむいひ傳へたる

誰が襖木綿付鳥か唐衣立田の山にをりはへてなく

わすられむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゞむる

貞観御時、萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ、詠みて奉

りける

文屋有季

神無月時雨降り置ける檜の葉の名に負ふ宮の古言ぞこれ

寛平御時、歌奉りけるついでに奉りける

大江千里

葦田鶴の獨おくれて鳴く聲は雲の上まで聞えつがなむ

藤原勝臣

人知れず思ふ心は春霞立ち出で、君が目にも見えなむ

歌召しける時に奉るとて、詠みて奥に書き付けて奉りける

伊勢

山川の音にのみ聞く百敷をみを早ながら見るよしもがな

卷第十九

雜體

長歌

題しらす

讀人しらす

逢ふことの	稀なる色に	思ひそめ	我が身は常に
あま雲の	晴るゝ時なく	富士の嶺 <small>ね</small> の	燃えつゝとはに
思へども	逢ふこと難し	なにしかも	人を恨みむ
わたつみの	沖をふかめて	思ひてし	思ひは今は
いたづらに	なりぬべらなり	行く水の	絶ゆる時なく

かくなわに 思ひみだれて 降る雪の 消なば消ぬべく
 思へども 閻浮の身なれば なほやます 思ひは深し
 足曳の 山した水の 木隠れて 沸つ心を
 誰にかも あひ語らはむ 色に出でば 人知りぬべみ
 墨染の 夕べになれば 獨り居て あはれくと
 歎き餘り 爲む術なみに 庭に出で、 立やすらへば
 白妙の 衣の袖に おく露の 消なば消ぬべく
 思へども なほ歎かれぬ 春がすみ よそにも人に
 逢はむと思へば

古歌奉りし時の目録の其の長歌

千早振る 神の御代より 吳竹の 世々にも絶えず
 貫之

天彦の 音羽の山の 春がすみ 思ひ亂れて
 五月雨の 空もとゞろに さ夜更けて 山ほととぎす
 鳴くごとに 誰も寢覺めて 唐錦 立田の山の
 もみち葉を 見てのみ忍ぶ 神無月 しぐれくと
 冬の夜の 庭も斑に 降る雪の 猶消えかへり
 年ごとに 時につけつゝ あはれてふ ことをいひつゝ
 君をのみ 千代にと祝ふ 世の人の 思ひ駿河の
 富士の根の 燃ゆる思ひも あかずして 別るゝ涙
 藤ごろも おれる心も 八千草の 言の葉ごとに
 皇の 命かしこみ 卷々の 中につくすと
 伊勢の海の 浦の潮貝 拾ひ集め 取れりとすれど
 玉の緒の 短き心 思ひあへず なほ新玉の

年を経て 大宮にのみ 久方の 晝夜わかす
仕ふとて かへり見もせぬ 我が宿の 忍草生ふる
板間あらみ 降る春雨の 漏りやしぬらむ

古歌に加へて奉れる長歌

壬生忠岑

吳竹の 世々の古ごと なかりせば 伊香保の沼の
いかにして 思ふ心を 述へまし あはれ昔べ
ありきてふ 人麿こそは 嬉しけれ 身は下ながら
言の葉を 天つ空まで 聞えあげ 末の世までの
あと、なし 今もおほせの 下れるは 塵に繼げとや
塵の身に 積れることを 問はるらむ これを思へば
古へも 薬けがせる けだもの、 雲に吠えけむ

心地して 千々の情も 思ほえず 一つ心ぞ
誇らしき かくはあれども 照る光 近き守の
身なりしを 誰かは秋の 來る方に 欺き出でて
御垣守 をさくしくも 思ほえず 九重の
中にては 嵐の風も 聞かざりき 今は野山し
近ければ 春は霞に たなびかれ 夏は空蟬
鳴き暮し 秋は時雨に 袖を貸し 冬は霜にぞ
責めらるゝ かるゝ侘しき 身ながらに 積れる年を
記せれば 五の六に なりにけり これに添はれる
わたくしの 老の數さへ 彌多ければ 身は賤しくて
年高き ことの苦しさ かくしつゝ 長柄の橋の
長らへて 難波の浦に 立つ波の 波の皺にや

瀬ほれむ さすがに命 惜しければ 越の國なる
白山の 頭は白く なりぬとも 音羽の瀧の
音に聞く 老いず死なすの 薬もが 君が八千代を
わかえつゝ見む

君が世に逢坂山の石清水木隠れたりと思ひけるかな

冬の長歌

凡河内躬恒

千早振る 神無月とや 今朝よりは 曇りもあへず
うちしぐれ 紅葉とゝもに 古里の 吉野の山の
山おろしも 寒く日ごとに なり行けば 玉の緒解けて
扱き散らし 霰亂れて 霜こほり 彌固まれる
庭の面に むらく見ゆる 冬草の 上に降りしく
白雪の 積り積りて 新玉の 年をあまたも

過しつるかな

七條の後うせ給ひにける後に詠みける

伊勢

沖つ波 荒れのみまさる 宮のうちには 年経て住みし
伊勢の蟹も 船流したる 心地して 寄らむ方なく
悲しきに 涙の色は 紅は 我等が中の
時雨にて 秋の紅葉と 人々は 己がちりん
別れなば 頼む蔭なく なり果て、 とまる物とは
花すゝき 君なき庭に 群れたちて 空を招かば
初雁の 鳴き渡りつゝ よそにこそ見め

旋頭歌

題しらす

讀人しらす

打ちわたす遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも
かへし

春されば野邊にまづ咲く見れど飽かぬ花賄なしにたゞ名告るべき花
の名なれや

題しらす

初瀬川古川の邊に二本ある杉年を経てまたも逢ひ見む二本ある杉

貫之

君がさす三笠の山の紅葉の色神無月時雨の雨の染むるなりけり

誹諧歌

題しらす

讀人しらす

梅の花見にこそ來つれ鶯の人來々と厭ひしもをる

素性法師

山吹の花色衣主や誰問へど答へずくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくばくの田を作ればか時鳥死出の田長を朝なく呼ぶ

藤原兼輔

七月六日七夕の心を詠みける

いつしかと待たく心を脛にあげて天の河原を今日や渡らむ

凡河内躬恒

題しらす

陸言もまだ盡きなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

僧正遍昭

秋の野に婀娜立てる女郎花あな囂し花も一時

讀人しらす

秋來れば野べに戯る、女郎花いづれの人かつまで見るべき
秋霧の晴れて曇れば女郎花花の姿ぞ見え隠れする
花と見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

寛平御時后の宮の歌合の歌

在原棟梁

秋風に綻びぬらし藤袴つゞりさせてふきりくす鳴く

明日春立たむとしける日、隣の家の方より風の雪を吹き來しけるを見
て、其隣へ詠みて遣しける

清原深養父

冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける

題しらす

讀人しらす

石の上古りにし戀の神さびて祟るにわれはいぞ寝かねつる
枕邊より脚邊より戀のせめ來ればせむかた無みぞ床中に居る
戀しきが形も形こそありと聞け立てれをれどもなき心地する

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねば戯れ憎きまでぞ戀しき
耳なしの山の口なし得てしがな思ひの色の下染めにせむ
足曳の山田の案山子おのれさへ我を欲しといふ憂はしきこと

紀のめのと

富士の根のならぬ思ひに燃えば燃え神だに消たぬ空し煙を

紀有友

逢ひ見まく欲しは數なくありながら人につきなみ惑ひこそすれ

小野小町

人に逢はむ月のなきには思ひおきて胸走り火に心やけをり

寛平御時后の宮の歌合の歌

藤原興風

春霞たなびく野べの若菜にもなり見てしがな人も摘むやと

題しらす

讀人しらす

思へどもなほ疎うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

平貞文

春の野の茂き草葉の妻戀に飛立つ雉のほろゝとぞ鳴く

紀淑人

秋の野に妻なき鹿の年を経てなぞわが戀のかひよとぞ鳴く

躬恒

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ

忠岑

隱沼かくれぬの下より生おふる蓴菜ねなはの寐ぬ名は立てじ來るな厭いとひそ

讀人しらす

ことならば思はずとやはいひ果てぬ何なぞ世の中の玉櫛たまきなる

思ふてふ人の心の隈くまごとに立ち隠れつゝ見るよしもがな

思へども思はずとのみいふなれば否や思はじ思ふかひなし

我をのみ思ふといはゞあるべきをいでや心は大幣おほぬきにして

我を思ふ人を思はぬ報むくいにや我が思ふ人の我を思はぬ

深養父

思ひけむ人をぞ共に思はまし正ただしや報なかりけりやは

讀人しらす

出でて行かむ人を止めむよしなきに隣の方に鼻も嚏ひぬかな

紅に染めし心も頼まれず人をあくにはうつるてふなり

厭はるゝ我が身は春の駒なれや野飼のがひがてらに放ち捨てつる

鶯うすに去年こぞの宿やどりの古巢とや我には人のつれなかるらむ

賢さかしらに夏は人まね笹の葉の騒さわぐ霜夜を我がひとり寝ぬる

平中興

逢ふことの今は二十日に成りぬれば夜深からでは月なかりけり

左大臣

唐土の吉野の山に籠るとも後れむと思ふ我ならなくに

なかき

雲晴れぬ淺間の山のあさましや人の心を見てこそ止まめ

伊勢

難波なる長柄の橋も造るなり今は我が身を何に喩へむ

讀人しらす

誠實なれど何ぞは善けく刈萱の亂れてあれど悪しけくもなし

興風

何かその名のたつ事の惜しからむ知りて惑ふは我一人かは

從弟なりける男に寄そへて人のいひければ

久曾

よそながら我が身に絲のよるといへば唯偽にすぐばかりなり

題しらす

讚岐

願事をさのみ聞きけむ社こそ果ては歎きの森となるらめ

大輔

歎き伐る山とし高くなりぬれば頬杖のみぞ先づ突かれける

讀人しらす

歎きをば伐りのみ積みて足引の山の峽なくなりぬべらなり

人戀ふることを重荷と荷ひもて逢ふ期なきこそ侘しかりけれ

宵の間に出でて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

其方にとと爲れば斯り斯く爲ればあな言ひ知らず合ふさ離るさに

世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ淺くなりなめ

在原元方

世の中は如何に苦しと思ふらむ多この人に恨みらるれば

讀人しらす

何をして身の徒らに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

興 風

身は捨てつ心をだにもはふらさじ終にはいかゞなると知るべく

千 里

白雪のともに我が身はふりぬれど心は消えぬものにぞありける

題しらす

讀人しらす

梅の花咲きての後の實なればや酸きものとのみ人のいふらむ

法皇西川におはしましたりける日、猿山の峽かに叫ぶといふことを題にて

詠ませ給うける

躬 恒

侘ましらに猿な啼なきそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

題しらす

讀人しらす

世を厭ひ木の本ごとに立ちよりて五倍う子ぶ染しの麻まの衣きぬなり

卷第二十

大歌所御歌

大直日おほなほひの歌

新らしき年の始にかくしこそ千年ととせをかねて楽しきをつめ

日本紀には、仕へまつらめ萬代までに

古き大和舞の歌

若木しもと結むすふ葛城山かつらぎに降る雪の間まなく時なく思ほゆるかな

近江振おみ

近江より朝立ちくれば宇禰うねの野に鶴たづぞ鳴くなる明けぬこの夜は

水草振

水莖の岡の館に妹とあれと寝ての朝けの霜の降りほも

四極山振

四極山うち出でて見れば笠縫の鳥漕ぎ隠る棚無し小舟

神遊の歌

採物の歌

神垣の御室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり
霜八たび置けど枯れせぬ榊葉の立ち榮ゆべき神の木根かも
まきもくのあなしの山の山人と人も見るかに山葛せよ
み山には霰降るらし外山なる正木の葛色づきにけり
陸奥の安達の真弓我が引かば末さへより來忍びくくに

我が門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草生ひにけり

ひるめのうた

さゝのくま檜隈川に駒とめて暫し水飼へ影をだに見む

かへしものゝ歌

青柳を片絲に繕りて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠

真金ふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ

此歌は承和の大嘗會の吉備の國の歌

美作や久米のさら山さらくくに我が名は立てし萬代までに

これは水尾の大嘗會の美作の國の歌

美濃の國關の藤川絶えずして君に仕へむ萬代までに

これは元慶の大嘗會の美濃の國の歌

君が代は限もあらし長濱の真砂の数はよみ盡すとも

これは仁和の大嘗會の伊勢の國の歌

大伴黒主

近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千年は

これは今上の大嘗會の近江の歌

東歌

陸奥歌

阿武隈に霧立渡り明けぬとも君をば遣らじ待てば術なし

陸奥はいづくはあれど鹽竈の浦漕ぐ舟の綱手悲しき

我が夫を都に遣りて鹽竈の籬が島のまつぞ戀しき

小黒崎みつの小島の人ならば都の土産にいざといはましを

御侍御笠と申せ宮城野の木の下露は雨に増れり

最上川上れば下る稻舟の否にはあらずこの月ばかり
君をおきて仇し心を我が持たば末の松山浪も越えなむ

相模歌

こよろぎの磯立ちならし磯菜摘む童子濡らすな沖に居れ浪

常陸歌

筑波根の此面彼面に蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

筑波根の嶺のみち葉落ち積り知るも知らぬもなべて悲しも

甲斐歌

甲斐が根をさやにも見しが心なく横折りふせる佐夜の中山

甲斐が根を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや言傳て遣らむ

伊勢歌

をふの浦に片枝差覆ひなる梨のなりもならずも寝て語らはむ

冬の加茂の祭の歌

千早ふる加茂の社の姫小松萬代經とも色は變らじ

藤原敏行朝臣

家々稱ニ證本ニ之本乍ニ書入ニ以テ墨滅歌今別書レ之

卷第十 物名部

ひぐらし

柚人は宮木ひぐらし足引の山の山彦よびとよむなり

貫之

在ニ郭公下空蟬上ニ

かけりても何をかたまのきても見むからは焰ほのほとなりにしものを

勝臣

をかたまの木 友則下

くれのおも

貫之

こし時と戀ひつゝをれば夕ぐれのおもかげにのみ見え渡るかな

忍草 利貞下

おきの井 みやこじま

小野小町

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこしまへの別れなりけり

三二〇

からこと 清行下

そめどの あはた

あやもち

うきめをばよそめとのみぞのがれ行く雲のあはたつ山の麓に

此歌は水のをの帝の染殿より粟田へ移り給うける時によめる

桂宮下

卷第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪下

けふ人を戀ふる心は大井川流るゝ水におとらざりけり

わぎもこにあふ坂山の篠すゝき穂には出でずも戀ひわたるかな

卷第十三

戀しくばしたにを思へ紫の下

犬がみのとこの山なるいさや川いさと答へよ我が名漏らすな

この歌、或人の、あめの帝の近江采女にたまへると

かへし

うねめの奉れる

やましなの音羽の瀧の音にだに人のしるべく我が戀ひめやも

卷第十四

おもふてふ言の葉のみや秋をへて下

衣通姫のひとりゐて帝をこひ奉りて

わが背子が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも

三二一

深養父 戀しとはたが名づけけむことならむ下

貫之

道知らばつみにも行かむ住の江の岸におふてふ戀忘草

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者。託其根於心地。發其花於詞林者也。人之在_レ世。不能_レ無爲。思慮易_レ遷。哀樂相變。感生_ニ於志。詠形_ニ於言。是以。逸者其聲樂。怨者其吟悲。可_ニ以述_レ懷。可_ニ以發_レ憤。動_ニ天地。感_ニ鬼神。化_ニ人倫。和_ニ夫婦。莫_レ宜_ニ於倭歌。倭歌有_ニ六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若_レ夫春鶯之囀。花中。秋蟬之吟。樹上。雖_レ無_ニ曲折。各發_ニ歌謠。物皆有_レ之。自然之理也。然而。神世七代。時質人淳。情欲無_レ分。倭歌未_レ作。逮_ニ于素盞鳴尊。到_ニ出雲國。始有_ニ三十一字之詠。今反歌之作也。其後雖_ニ天神之孫。海童之女。莫_レ不_レ以_ニ倭歌。通_レ情者。奚及_ニ人代。此風大起。長歌短歌。旋頭混本之類。雜體非_レ一。源流漸繁。譬猶_レ拂_レ雲之樹。生_レ自_ニ寸苗之煙。浮_レ天之波。起_中於一滴之露。至_レ如_レ難波津之什獻。

天皇。富緒川之篇報中太子。或事關神異。或興入幽玄。但見上古歌。多存古質之語。未爲耳目之翫。徒爲教誡之端。古之天子每良辰美景。詔下侍臣預宴筵者。獻倭歌。君臣之情。由斯可見。賢愚之性。於是相分。所以下以隨民之欲。擇中士之才也。自三津皇子之初作詩賦。詞人才子。慕風繼塵。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改。倭歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山邊赤人者。並倭歌仙也。其餘業倭歌者。綿々不絕。及下彼時變。澆漓人貴奢淫。浮詞雲興。艷流泉涌。其實皆落。其花獨榮。至有下好色之家。以此爲花鳥之使。乞食之客。以此爲活計之媒。故半爲婦人之右。難進大夫之前。近代存古風者。纔二三人而已。然長短不同。論以可辨。花山僧正。尤得歌體。然其詞花而少實。如三圖書好女徒動人情。在原中將之歌。其情有餘。其詞不足。如菱花雖少。彩色而有中薰香。文琳巧詠物。然其體近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾滯。如望秋月。遇曉雲。小野小

町之歌。古衣通姬之流也。然艷而無氣力。如病婦之著花粉。大友黑主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有逸興。而體甚鄙。如三田夫之息花前也。此外姓氏流聞者。不可勝數。其大底皆以艷爲基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利。不三用詠倭歌。悲哉。悲哉。雖下貴兼相將。富餘金銀。而骨未腐於土中。名先滅於世上。適爲後世被知者。唯倭歌之人而已。何者。語近人耳。義慣神明也。昔平城。天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過三百年。其後倭歌棄不被採。雖下風流如野宰相。輕情如在納言。而皆以他才一聞。不下以斯道。顯。陛下御宇。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頌。洋々滿耳。思繼既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻家集並古來舊歌。曰續萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒爲三二十卷。名曰古今和歌集。臣等詞少春花之艷。名竊秋夜之長。況乎進恐

時俗之嘲^{リヲ}。退慙^{テツ}ニ才藝之拙^{キヲ}。適遇^{トヒテ}ニ倭歌之中興^ニ。以樂^{ヲム}ニ吾道之再昌^{ビエンヲ}。嗟乎^ニ人麿既沒^{ニスレドモ}。倭歌不^ラ在^ラ斯哉^ニ。于^レ時延喜五年。歲次^ルニ乙丑^ニ。四月十八日。臣貫之等謹序^{テス}。

古今和歌集終

いてふ本校訂者

沼波瓊音 山田美妙 杉谷代水 泉斜汀 山内素行 石村貞吉 山田三子 所金藏 村山靜人 郷白巖 中島悅次 川添文子

昭和十一年五月十五日印
昭和十一年五月十九日發

刷行

いてふ本
古今和歌集

定價
金五十錢

不許
複製

發行所

編輯者

三教書院編輯部

發行者

東京市中野區高根町六番地
鈴木種次郎

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社

東京市中野區高根町六番地

三教書院

營業所

東京市神田區錦町一ノ二五
電話神田二四〇八番
振替東京四五八〇番

67
466

いてふ本刊行の辭

現今この新書界は漸く我が國の過た外來思想偏重の移對
し出た漸く目下に於ては、
吾れは、非難を蒙るゝ者、多し、
如くも、其の、多し、
高等の、
も、
等、
大、
當、
を、
頃、
さ、
一、
を、
不、
を、
あ、
と、

昭和十年五月

三教書院主

いてふ木既刊目錄

(昭和十一年五月現在)

古	日	愚	神	萬	枕	古	平	保	增	曾	義	徒	源	平	平	近	西	佛	蕪	
事	本	皇	葉	葉	今	家	元	平	家	我	我	然	氏	安	安	松	鶴	七	村	
記	管	正	集	集	和	物	平	家	物	物	經	然	物	朝	朝	心	部	七	村	
抄	統	集	上	上	歌	語	治	物	語	語	語	草	語	物	物	中	集	部	七	
全	中	全	全	下	中	上	中	中	上	上	上	上	上	全	全	全	全	全	全	全
雨	日	論	文	唐	三	武	武	白	駿	益	新	日	東	東	東	釋	佛	佛	蕪	
月	本	章	章	詩	體	將	將	將	將	軒	蓮	蓮	海	海	海	八	八	八	八	
物	外	軌	軌	詩	七	法	法	法	法	養	大	大	道	道	道	相	相	相	相	
語	史	上	上	選	詩	語	語	語	語	生	士	士	中	中	中	舍	舍	舍	舍	
全	上	中	全	全	全	全	全	全	全	全	真	真	隆	隆	隆	源	源	源	源	
											實	實	栗	栗	栗	氏	氏	氏	氏	
											傳	傳	毛	毛	毛	全	全	全	全	
											全	全	全	全	全	上	上	上	上	
											五	五	四	四	四	下	下	下	下	
																二	二	二	二	

綴がよらず耐久力は殆ど永久的です。

終

